

第2部 聞き取り編

この聞き取り調査の文は、平成24年9月～11月にかけて、三池炭鉱の元炭鉱マンや炭鉱関連産業従事者、その家族など6組7名に対して、NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブによる取材によって得られたものです。各人のプロフィールに登場する年齢・履歴等は平成24年に取材した時のものです。

さるわたり めぐむ 猿渡 恵 さん



プロフィール

男性、64歳、大牟田市出身、三池鉱業所の係員・水道課→フレッシュウォーター三池→大牟田市石炭産業科学館受付

就職するまで

私は根っからの地元の人間で大牟田以外で仕事をしたことはない。昭和38年の炭塵爆発の時は、高校1年だった。三池工業高校3年生の6月に会社の採用試験を受けて合格した。この高校はもともと三池鉱山の私学で優秀な先輩をたくさん輩出していた。高校では、車などの機械の構造や機械加工などを教わったので、炭鉱の仕事に特化して学んだわけではない。当時は、ベビーブームで不景気、就職難だった。ちょうど高校3年生の8月に、自校（三池工業高校）が甲子園に出場し、初出場で初優勝した。大牟田にとってこの優勝は、労働争議の後、疲弊して不景気だった時代の中で大きな、（地域が）活性化する出来事だった。優勝パレードには大勢の市民が詰めかけて押すな押すなの盛況だった。スポーツカーを用意して生徒を全員乗せパレードを始めたが全部途中でオーバーヒートしてしまったという思い出もある。

入社から閉山まで

入社は昭和41年、職員採用で三井鉱山に入り、係員として働く。当時はベビーブーム世代の就職難で、その数年前ほどから新規採用を始めた三井鉱山は安定した就職先と思った。入社のかっかけは、父が

三井鉱山三池鉱業所資材部輸送課に勤めていたからだが、入れ替え採用ではない。父はトラックや通勤バスを運転していた。父が定年するまで、部署は異なるが一緒に在職していた。

見習で坑外実習を1年、2年目は坑内実習を1年、宮浦坑、四山坑、三川坑をそれぞれ4か月ずつ行った。3年目に希望を出すことができ、家から近い宮浦坑を希望したが、実際は四山坑に配属が決定した。

配属直後は事務職をしながら実務に必要な国家資格の勉強をして試験に合格した。四山坑には15年いた。機械調査係員で1年後に坑内勤務、結婚した昭和48年に坑外の機械調査係員が2～3年。坑内と坑外では給与に相当の差があり、坑内勤務を15年すると55歳から年金が100%もらえたことから坑内勤務を希望する人が多かった。その後、坑内の本線機械（石炭運搬機械や排水のメンテナンス、冷房装置の維持管理、換気など）の主席係員を3年ほどした。一つの仕事を覚えたら、すぐ別の仕事を任されるというようにどんどん変わることが多かった。その後、常一番の開発機械、常一番の部内機械、昭和53年に三交替主席係員を歴任した。さらに1年ほど坑外の機械調査の主席をした。

四山坑の思い出といえば、本線機械にいたときに深度マイナス670m付近で当時の三池炭鉱で一番深い所にあるポンプ座^{*}を据えたことである。四山は深いところを掘っていたので水も多かったし、水温も高かった。直径450mmのでっかいパイプを延々と配置し、1,000トンバッグが3本、設計容量は20トン/分だったが、実際の湧水量が設計のほぼ倍だったため、ポンプも最初は375kwの10トン/分だったものを450kwの15トン/分に設計変更し3台据えた。この670mのポンプ座は三池炭鉱の最後から2番目の新設のポンプ座だった。

また昭和54年頃、坑内の直接冷房設備がドイツから2台導入された。ドイツ人技師から私が直接指導を受けて設置し維持管理を行った。その後、次々に直接冷房設備が10台導入された。

昭和 58 年に本社勤務

昭和 58 年に本社(本所)の施設部の機械担当勤務となり、4 年ほどその勤務にあたった。

この頃には、三山(三川坑、有明坑、四山坑)が坑口であり、自分は三川坑の第 1 斜坑ベルトコンベアの営業費予算統制や、業者へ委託していた社宅 24 か所の共同浴場の予算管理(水道代、ボイラー代、番台の人件費など)を担当した。合理化縮小で浴場を少なくしていく際の業者との折衝も担当した。ヤマの故障報告も受けていた。

昭和 59 年 1 月 18 日の有明鉱火災のときは、直前の 1 月 2 日に有明坑の坑内の巻き上げ機の運転手の教育をしに行っただけの出来事だった。事故直後は資料作りで毎日夜遅くまでかかった。検察がダンボールを抱えて書類を押収に来たこともあった。忙しさは 1 年くらい続いたと思う。

昭和 61~63 年に、縮小し人を減らすという、3 年連続の合理化があった。昭和 63 年、人員減少を補う目的で機械化・省力化が進んだ大量採炭設備、三池ハイパワー・プラント(MHP)の 1 台目が導入され、第二鉱(旧有明鉱)坑内に設置するため、施設係長として赴任した。

昭和 63 年~平成 5 年に有明坑の施設第一係長(施設課長代理)

昭和 63 年からは第二鉱の施設係長として機械の新設・撤去・維持保全を担当。平成 3 年の雲仙普賢岳の噴火の年に、JICA(国際協力事業団)より、短期専門官として韓国の江原道(カンウオンド)に行った。韓国への技術指導として、粉塵対策、冷房対策を日本の支援で行っていた。平成 5 年からは、施設課長代理を拝命し職員組合を離れ、管理職となった。平成 6 年にはオーストラリアへ炭鉱の視察に行った。炭鉱の規模の大きさに驚いた。この当時といえば、繰り込み場で 100 人くらいの人数を前に保安啓蒙するのも仕事の一つだったが、これが、苦手だった。保安について数分の説明をするのだが、100 人ぐらいを前に話す。これを 1 日 4 回行った。その他には、係員を対象とした保

安教育（1時間くらいの講義）を、OHP を使って行っていた。

閉山、浄水場で働く

閉山は平成8年頃、閉山が現実のものであることを初めて報道で知った。閉山は49歳の時だった。閉山前は部下を次の職場に送り出し、少なくなっていく人数で仕事を回すのに追われた。自分は4～5日前に水道課に行くことを知る。なかなか（閉山の）現実は受け入れられなかった。閉山当日は、全ての機械を置いたまま人だけ上がってきたような感じで、「ああ、明日から坑内に入られんたいなあ、次第に機械などが水没していくだろう」と思うと虚しい気持ちになった。でも、高低差があるのですぐに水がせめ上がってくるわけではないので、取り出しやすい場所の機械は残務要員の人達が坑外揚げした。坑内に取り残された資材や設備は、今も坑内に水没している。坑内の水は溶解性鉄分をものすごく含んだ水である。閉山後、翌日から宮原浄水場の水道課長として勤務に入った。

宮原浄水場は閉山対策の三井系列の子会社の一つ（正式名称はサンビルド、九州ビルシステムなど）だった。7～8歳上の生え抜きの上司に教えてもらいながら、平常業務は設備投資計画・営業予算管理など。

そこで定年を迎えたが、再雇用され、平成24年の64歳までシニア・アドバイザーとして働いた。その仕事は後輩の教育、草刈り、各所ポンプの巡回・点検、残塩調査等を行った。最後はフレッシュウォーター三池という名前だった。上水道には社水と市水があるが、社水の方が歴史が長い。

大牟田市石炭産業科学館へ

現在、大牟田市石炭産業科学館の受付として館内説明などを行っている。説明は、係員のときに大人数を前に説明することはあったので、大人にするのは慣れているが、小学生の社会見学は、苦勞する。

石炭館の展示と比べて、実際の坑道は真っ暗で、扇風機運転音などが大きい。場所によっては、気温、湿度が高かった。閉山が決定してから、坑内を撮影したいと決まれば、機械に白ペイントをして見栄えをよくしていた。

家族と日々の暮らし

入社後は実家から通っていたが、昭和 48 年に結婚し、小川開の職員のアパートに住んだ。社宅は昭和 38 年に完成したアパートで、広さは 3LDK。3 階建ての 2 階だった。

坑内に配属のときは、現場と連絡をとる必要のある担当者のところにはすぐに炭鉱電話をつけてくれた。アパートの中に自宅用と炭鉱電話（炭鉱専用回線）の 2 台のダイヤル式黒電話があった。現場と連絡をとる必要のある担当者のところにはすぐに炭鉱電話をつけてくれた。坑内との連絡もそれで、何かあった時の呼出しもそれでかかってくる。寝床の横に炭鉱電話を置いていた。電話が鳴ると故障か、けが人か、何かないと現場に出ていった。

その後、実家に戻ったが、昭和 63 年、再び坑内に下がる仕事になったので、小川開の平屋の社宅に入った。仕事場へは通勤バス又は自家用車で通っていた。平成 22 年からは、実家に戻り、田舎暮らしをしている。

勤めていた頃は、あまり休みはなく、半日の日も。あったら子供と遊んだり。なぜなら、機械は、掘っていない日曜にメンテナンスをするため。それだけでなく、緊急で、けが人や災害対策で駆り出されることも多かった。

勤めた当初は会社を辞めたいと思ったことが何回かある。実際に25～26歳で盲腸になり、2週間入院し、今でも切った傷がある。精神的なストレスが原因か？

危険といえば、壁に挟まれそうになったり、急に機械が動いたので間髪なかったり…ということがあったが、大きなけがなく、勤め上げたのは幸運である。また、自分の担当現場で、けが人が出ることはあったものの、死亡事故はなかったというのが、幸いだった。

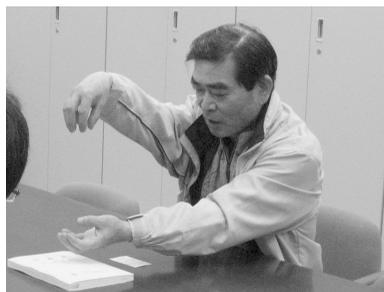
妻は社宅の人と、洋裁をしたり、子供の保護者同士で、付き合いがあったりした。離れて暮らす今でも、当時の住人だった人と会ったりする。

社宅のご近所は、大体職場で顔見知りであった。現在は年に1回、四山鉦不知火OB会で炭鉦の仲間と歓談するのを楽しみにしている。

きくもと やすお
菊本 保男 さん

プロフィール

男性、60歳、長洲町出身、三井三池製作所(三作)製缶(せいかん)工(退職)、銀水社宅在住経験(現在は大牟田市内在住)



生まれ

熊本県長洲町生まれで兄弟はいない。小学2年生頃、大牟田の三里町に引っ越した。社宅ではなく借家だった。転居したが、父の仕事は変わらなかった。長洲は田舎という感じだったが、三里町は長洲より活気があり、四山分校や社宅に近く、四山・県境では活気があり、ヤミ市場や夏祭り時期には、見世物小屋(四山神社の北側の坂のふもと付近)、おぼけ屋敷などの露店が並び、その頃が炭鉱の最盛期であった。

当時は四山に三里小学校の分校があり、運動会などは本校に分校の児童がやって来ていた。炭鉱電車は当時タダで、四山神社前の西原(にしばる)駅から原万田や万田まで電車に乗って友達の家遊びに行ったりしていた。また電車に乗ること自体が遊びでもあった。電車は三川坑などへの通勤目的や奥様方の買物などにも利用されていた。四山には四軒長屋の社宅があった。三池港の海水浴場でも泳いで遊んでいた。友達と海水浴場に遊びに行くと、足がごそごそするので拾ってみるとアサリ貝だったので、いくらか拾って翌朝の味噌汁になったりしていた。そこでよく遊んでいたのは、かくれんぼ、こま、ビー玉、パチ(めんこ)などだった。

三池争議の頃の記憶はないが、おじが炭鉱であったので、おじの妻が座り込みに行ったりはしていたようだ。

仕事を得るまで

昭和 41 年 4 月、中学校卒業後、築町にある三池製作所の技能訓練所に養成工*として入社し、1 年間研修した。わずかながら給料も出た（三作には渡瀬に中卒後の 3 年制の付属学校を持っていたが、これとは異なる）。

小学 6 年生のときに、三川坑炭じん爆発事故があり、通った小学校（三里小）の校舎が揺れたような記憶があり、「炭鉱＝事故」のイメージはあった。だから、採炭か、炭鉱機械かとなったとき、モノを作る方に進んだ。結局、親と相談して、手に職をつけた方がいいし、三作の方が地上の仕事で安全でやり甲斐があるのではないかと思い、三作に決めた。

三作は昭和 34 年に、三池炭鉱から独立したという経緯がある。独立後も炭鉱機械のシェアはトップだった。三作は炭鉱機械の修理工場にあたる。三作マシナリーや三池産業機械は形としては部門別に分社化した。私がいた製造部門は三作マシナリーとなっている。機械担当が三作精工である。有明機械も三作の下請け会社として発足している。かつては渡瀬と栃木に工場を持っていたが、閉鎖したり分社化したりしている。

三作での仕事

入社 1 年目はグラインダ（みがき作業）をやっていた。入社当時の勤務は炭鉱と同じく交替勤務制。三交替・二交替があった。私の部門の場合は、三交替ではなく 8 時始業の 16 時終業だった。残業は遅くとも 19 時頃までだった。他の会社の人はうらやましかっただろう。もっとも、じわじわと普通の会社と同じような勤務時間になっていった。入社当時は三作の組合は労働組合と職員（職長・係長・課長）が入

る職員組合があった。後に労働組合に一本化された。のちに昇格して職員待遇にはなったが、その当時は組合が一本化されていた。組合では炭鉱の組合の昇給妥結額のおおよそ何割という形で製作所の妥結額も決まっていたようだ。三作の労組とは、今でも付き合いがある。

製缶工とは、金属加工のことである。モノを作るのが主な仕事。鉄板1枚から部品を切り出し、製造するのが仕事であった。いかに効率よく作るかが問われる。三作は受注製作なので、確かに製造部門はある程度の規格はあるものの、ほとんどは一点ものだった。

仕事に関することは炭鉱から分離した会社なので親分肌で職人氣質の人も多く、仕事を教えてもらえる状況ではなかった。その頃「棒心」というグループの長がいて、3～4人をまとめていた。何十人の中で数人が棒心で、職長から棒心に図面を渡し、棒心から部下に仕事をさせていた。実際には部下は棒心の年季奉公という感じだった。だから、教えてもらうというよりも、先輩の寸法の取り方や技を盗むという感じだった。

こうした形で、注文を受けて図面を書いて、その図面から物を作り上げなければならないので、図面が読めないといけない。例えば、斜めについているようなものは図面を図面通り見ただけでは分からない。そのため、三池工業高校の夜学に4年間通い勉強した。いろいろな会社から来ていた。まあ、仕事疲れでよく居眠りしていたり、辞めようと思ったこともあった。図面を見て、現物を見て、学校で勉強する、というサイクルがあるので、学校に行ったのは非常に役立った。

具体的に製作したものといえば、ロードヘッダーであれば部品をそれぞれ鉄板など材料から切り出すというものだった。ロードヘッダーのアームの部分とか掻き寄せフレームとかも作っていた。三池港の港務所の連続アンローダーの基礎の特定の部分なども工場で自分が手掛けた。連続アンローダーはベルトコンベアで巻き込んで上にあげるタイプである。

入社して10年目頃(昭和47年)に港工場ができた辺りから割と大きな製品を造りだした記憶がある。

実は、工場にあるクレーンのトン数(大きさ)を見れば、大体どれくらいのもので製造できるのかが判断できる。三作の港工場には30トンと40トンのクレーンが座っているので、計算上は合計70トンまでのものを製造できるということになる。

私は基本的には新しいものを工場で作るという仕事だったが、仕事として記憶に残っているのは、大牟田外へ出張し、納入した機械のメンテナンス及び補修(点検・駆動部などの取り換え・溶接などの補修)を数日から数カ月程度した仕事である。とりわけ苦小牧で、アンローダーという石炭の積み下ろしの機械を納入し、仕事をしてきたことが一番の思い出である。北九州の新日鉄では、石炭揚げ運搬の機械の仕事をした。退職前の10年ほどは年に4～5回ほどは短期間のものを含めて出張のメンテ・補修をした。

ロードヘッダーは鉱山だけでなく、工事現場やトンネル工事でも重宝された。トンネル工事の最先端に行ったりもした。横浜ベイブリッジの一つ手前の橋(海上)、高速道路のトンネル中のファン(トンネル内のジェットファン、トンネル立坑のコントラファン)は随分作った。

炭鉱の坑内は、三川坑の排気坑道の途中にあるファンの修理などをしに行ったことがある。盆休み等炭鉱が稼働していない時に、スケジュールを組んで二交替で仕事をした。入気坑道^{*}は銀座通り、排気ははじめじめした状況だった。第二人工島(港沖立坑)のファンを手掛け、また有明坑の立坑ケージのガイド(スラセ)も「コ」の字型のチャンネルと鉄板を組み合わせて製作した。ケージのロープを巻きつけるドラムも製作したことがある。その際はワイヤの自重も考えて製作しなければならない。

一番大きなものは沖縄の火力発電所に一基3,000トンの連続アンローダーを二基納めたことがある。あまりにも重いものだったので、

船が揺れて輸送船本体のフックが4つのうち1個無くなっており、船から降ろせず、一般的な「ピンシャコ」（ピンシャックルのこと。ロープなどを連結するための金具で、U字型の金具と先にねじを切った棒とからなる）という金具を急遽取り寄せて加工して代用し、事なきを得たことがある。

35年間勤務していたが、思うところがあって定年前に退職し、元上司がやっていた電気化学工業の修理工場の作業長として転職し、60歳で定年退職した。

住居・家庭生活

入社2年後、三作の銀水社宅(二軒長屋)に母と二人暮らしだった。三作の社宅だけで、渡瀬、大間、その他のところに400~500軒ほどはあったであろうか。母が隣近所の方とワイワイガヤガヤとやっていた。家の前の側溝の掃除など、母が「やろうかあ」と声をかけると、周辺の皆さんが出てきて側溝掃除を始めるといふ感じで、和気あいあいとやっていたようだ。一緒に仕事をしている人が、何軒か先の社宅に住んでいる人だったりということが普通であり、社宅の自治会行事で盆踊りやソフトボール大会などもする雰囲気があった。昭和55年に妻と結婚したが、妻も会社の同僚の妹である。また三井鉱山系列なので、炭鉱と変わらない条件で会社の施設である診療所やお風呂を同じように使うことができた。

15年間ほど銀水社宅にいたが、銀水社宅を更地にするということだったので、荒尾の緑ヶ丘小学校近くのアパートに平成2年頃に移った。なお、平成4年に大牟田に一軒家を建てて、現在もそこに住んでいる。

かねこ ふくみ 金子 福久美 さん



プロフィール

女性、58歳、大牟田市出身、三井三池製作所→三池鉱業所勤務の男性と結婚・退職→英会話講師・がんばろい大牟田の会・大牟田市カルタ歴史資料館元館長(平成24年3月まで)

生まれと就職するまで

生まれも育ちも大牟田市の明治校区。三池炭鉱専用鉄道(の浜線)よりも北側、つまり街中で育ったので、結婚しなければ炭鉱のこととか、社宅のこととかも、全然経験はしなかっただろう。小さい頃にあった、争議とか爆発事故の記憶もない。小さい頃は私たちの生活が社宅に全然つながっていなかった。親とかは話していたかもしれないが、恩恵を受けていたとすれば、新栄町の売店。あそこに買物に行っていたということだけは、覚えている。みそ、しょうゆの計り売りとか、市場とか、まだそんな時代(新栄町ができる前の栄町の頃)だったので。その頃は、誰でも買いに行けた。

両親は自営業で、海苔の生産・加工会社をしていた。高校卒業後、久留米の調理士専門学校に行き免許を取得。卒業後、おじが大阪にいたこともあり、そこで仕事をしていましたが、1年もしないうちに、実家の手伝いをするため、大牟田に帰ってきた。給料がもらえるわけではないので、就職しようと思ったところ、親の知り合いの紹介で、三井三池製作所に就職。労働組合の事務員として4年勤めた。

同時に、学生時代からやっていた剣道を再開した。再開のきっかけは、剣道サークルが「三鉱(さんこう)道場」といって、鉱山の本社

の中に体育館・講堂（現：大牟田市立病院）があった。そこは、炭鉱で仕事の後に従業員たちが、合気道やったり、柔道やったり、剣道はもちろん、バレーボールなどをする場で、炭鉱の福利厚生面の面もあったのだと思う。普通、職員のスポーツ選手というと、警察官や他の公務員が多いが、企業で選手を輩出できたというのは珍しく、大企業だからこそできたことだろう。そこで、「剣道やってるよ」というのを聞いて、社会人剣道を始めることとなり、結局、剣道で炭鉱に関係していった。そこで、主人と知り合った。

夫は鉱山の社員（鉱員）で、若い頃は地下（三川坑）に潜って石炭を掘っていて、もともとは坑内作業に従事していたが、けがをしたこともあり、施設工（修繕）で三川坑に下がっていた。三井火力発電（三川坑）に出向していた。給料は月給制。その後、有明坑事故の時も、坑内に下がる配属だったが、当日は担当ではなかった。

夫は、大牟田生まれ大牟田育ち（小浜町）。小さい頃から剣道の有力な選手。実家は野菜屋だった。小さい時から習っている師匠が鉱山関係に勤めて剣道していたこともあり、夫も鉱山で働くことになった。交替勤務もあったが、三交替しながらも、仕事後は必ず剣道の稽古をしていた。剣道選手として、実業団の試合に出ることもあった。「三鉱道場」に通っているというだけで、恐れられるくらいの強豪な道場であった。

結婚と社宅の生活

結婚は26歳（夫34歳）のときだった。結婚を期に製作所を退職。結婚2年後に長男が生まれる。その後、次男を授かる。剣道は子供がお腹にいたときも、練習をしていた。次男が幼稚園の頃から閉山までは、英語のホーム・ティーチャーをしていた。剣道をしている人と、英語で話したいと思って、英語はずっと好きで独学で勉強していたが、教えながら身につけようと思い、平成元年に講師となった。クラスは幼児から大人まで、夕方に週2～3回程度。主人が三交替で、寝てい

るときは気を遣いながらすることもあった。人の出入りが激しい生活だったので、子供は人見知りを全然しなかった。

昭和 56 年に社宅に入る。社宅は白金社宅（職員社宅）。この辺一帯は、他企業も含めて、幹部職員社宅や住宅群の地域。自分の社宅は 100 坪ぐらいあり、一戸建てだが二軒つながっている。それが、周囲を含めて 7 棟あった。

社宅の立地条件は良かった。駅や病院に近く、買物も近所に商店（正山売店）があり便利だった。戦後に建てられたので古い（畳を取ったら防空壕にできるようなコンクリートの穴が空いていた）建物であったが、4DK（6 畳・8 畳・6 畳・4 畳半、台所、風呂付）で、これまで、住んだことのない広さだった。旅館のようで、庭も広い。社宅が広いので、剣道の同僚と宴会を頻繁に開く拠点になっていた。ふすまを取り除いて、畳部屋をつなげた。最高 40 人ぐらい集まった時もある。結婚後に入居したため、近所と年代が異なり、よその職員どうしはあまり付き合いがあるような感じではなかったが、ご近所とは割と頻繁に付き合いしていた。

社宅の福利厚生が良いのも特徴。畳替え（盆と正月）、ふすま替えは無料。水道代・家賃は安い。そのため、この時期にお金を貯めるよう言われた。その後、家賃はだんだん値上がりしたが、それでも数千円程度だった。

白金社宅には、閉山までいた。数か月は延長して入居できたが、閉山を期に取り壊すことになり、家を探し、西宮浦町に家を建てた（現在も在住）。引っ越し際には新聞社の取材も受けた。引っ越しを機に、ホーム・ティーチャーは辞めている。

夫の仕事と閉山

閉山の時には、夫は、有明坑（三池坑）から入坑・昇坑。夫が有明坑にいるからというだけではなく、炭鉱が無くなれば大牟田はどうなるんだろうという思いがあった。働くところがあり、そこに家族がい

て、社会があつてという風に、まちは活性化してきた。それが無くなるということに直面し、炭鉱に対しありがたかったなという気持ちが出てきた。じゃあ、私たちにできることは何かと考えたとき、「お疲れさま」という一言を、言ってあげたいという気持ちになり、閉山時に、「お疲れ様」と言うねぎらいの催しをすることにした。

自分で、市民の人たちに、閉山する日に有明坑に来てくれるよう、お願いし、70～80名くらい集まった。横断幕を作って、通る従業員に「お疲れさまでした」と呼びかけた。閉山当日のお昼頃、一番方が昇坑し、二番方が入坑する時間帯だった。彼らは、手を上げたり、クラクションを鳴らしてくれたりしてくれた。

夫は、閉山後は「黒手帳」をもらい、閉山の離職者対策で優先的に職業訓練に通い、再就職をした。その後は、別の職種に転職。再就職先は、炭鉱や前職の技術を活用するところではない。

閉山前後の頃には夫の給料がだんだん少なくなる状況であった。閉山前に警察官など他の職種に転職することもできたので、私は見切りをつけてほしいと思って夫に言ったが、夫は（仕事よりも）「仲間と一緒に剣道がしたい」、三鉱道場で剣道をし抜くという意志が強かったため、転職という気持ちにはなれなかったようだ。三鉱道場は閉山まであり、その後、病院が建設するための道場解体まで稽古をしていた。大牟田市の体育館を借りて練習していた。

国際交流・ホームステイ事業

平成2年に海外交流で、空手をしていたカナダ人を1週間ほど受け入れてから、剣道で外国人をホームステイさせていた。たまたま、福岡県のホームステイ事業があるのを見つけ、会員登録した。ホームステイを自分の家（社宅）で受け入れてみると、玄関入ってから、畳だ、汲み取り式トイレだっていって、日本というものを紹介する意味でも、社宅というのは良かった。ホームステイの事業も、家屋事情、社宅が使えて広がったというのもあって、始めることができた。食事から滞

在費も、お金をとるわけではないので、会社の許可も特にいらなかった。外国の方とは、英語でコミュニケーションをとる。ヨーロッパから南米から、長い人で、1年くらい。現在も継続。武道に関心のある外国人は多く、国内外を問わず、夫の剣道を教えてもらいたい・習いたいという人がいれば、自宅に受け入れている。

さるわたり たくみ

猿渡 巧 さん

おくぞの みつこ

奥苑 満子 さん



プロフィール

(猿渡さん) 男性、平成 24 年 11 月現在 89 歳、三池鋳業所宮浦鋳電気係員、大牟田市出身、長溝社宅、下記奥苑満子さんは長女

(奥苑さん) 女性、平成 24 年 11 月現在 61 歳、長溝社宅で育つ

三池炭鋳に入社

小学校卒業後、12 歳で宮浦坑に採用となり、大牟田に住むようになった。三池炭鋳に機械工のおじがいた。もう一人のおじも電気工にいたこともあり、「炭鋳は嫌だ」と思ったが、おじに「電気の仕事もあるので入ったらどうか」と勧められたこともあり、三池炭鋳に就職。就職できる年齢（15 歳）までは、第 2 期養成工として 2～3 年過ごした。給料は日給 55 銭、午前中に学科、午後実践だった。研修で、電気の仕事以外に採炭などの実習もあったが、会社の土地の山の切り崩しや公園づくり（勝立）などもやっていた。

本採用になる

鋳員で坑外の機械工として本採用され、電気の修繕を担当、初めは上司について教えてもらった。電気の仕事は変電所など坑外の仕事が多い。仕事の中心は電気設備及び配線等の据え付け、点検、結線など。点検は目視で、ケーブルが傷んでないか確認していた。

1日の仕事

繰り込み場で20～30人が集まり、仕事内容の指示を受ける（繰り込み）。宮浦坑から入坑するが、担当場所（初島・宮浦・横須（北磯町）、南新開（みなみしんがい）など）までは人車で20～30分かかる。中で弁当を食べていた人もいた。三交替は一週間でローテーション交替制、仕事の内容によっては常一番のときもあった。

戦地に通信連隊として召集

昭和18年に戦地に召集され、香港に1年、北京に1年いた。通信連隊（陸軍）配属だった。日本軍の通信教育係で電気の仕事をやっていたことも考慮されていたかもしれない。

入隊する時分、大牟田は戦禍がひどくなく、行った先も戦場ではなかった。戦地では通信係として、通信の学校で学んでいた。修了したその日が終戦の日で、宿舎は他の中国人が利用するため、すぐに帰国することになった。担当が中国人で、帰りの手はずを整えてくれ、帰してくれた。行きは列車で時間をかけて行ったのに対し、帰りは船で佐世保に帰ってきた。大牟田に着いたときには、焼け野原だったが、市役所と松屋と線路沿いの自宅周辺は、焼けずに残っており、自宅に戻るのに苦労はなかった。帰国してからはすぐに、鉱員として働くことができた

（満子さん）父は、よく戦地に行った時のことは、話してくれることが多い。

職員（係員）採用

終戦後、資格試験（電気三種）を受けて合格したため、職員採用となる。鉱員に指示を出し、まとめる責任者の立場となった。給料は月給制となった。採炭方法が変わると、電気系統も変わり、仕事内容も変わっていった。ドラムカッター※の導入で、ケーブルを引っかける

ことが多くなり、ケーブルの取り換えをやった。宮浦坑は特高（特別高圧）電気を採用していた。残柱式*から小切羽（上下段のスライシング*）採炭へと変化していき、また運搬も炭罐*（たんがん）からベルトコンベアへと変化していった。三池争議時には、職員組合の一員として、すぐに生産再開できるよう訴えた。当時既に主席係員になり、係員をまとめる立場であった。昭和 53 年に 55 歳で停年退職したが、停年 3 か月前の昭和 52 年までは宮浦坑の担当、昭和 52 年に宮浦鉦と三川鉦が合併し、残り 3 か月は三川坑に勤務した。

思い出に残っていることは

特殊な仕事だなということ。

（満子さん）爆発事故は非日常で覚えている。小学校に集められて、被害に巻き込まれてないか確認した。遺体があがってくると、親戚で亡くなった人もいた。ガス中毒で亡くなると頬は赤く、ヘルメットをしたまま眠ってるように倒れていた。

家族のこと

父（巧さんの父）はぜんそくがひどかった。そのため、転職し、三池製作所に勤めた後、自転車屋をしていたが、それもしばらくするとやめて、久留米の BS（ブリヂストン）に据え付けの仕事をするも、退社。母が父の入替採用で BS に入社した。

妻（柳川の蒲地（かまち）出身）とは親戚の紹介で知り合い、結婚した。妻は結婚後に大牟田に住んだ。専業主婦だった。踊りの「あずまや」の名取りをとり、60歳で他界した。結婚後に生まれた子供は、昭和 26 年に長女（奥苑満子さん）が生まれ、昭和 33 年に次女が生まれた。7つ違いである。

暮らしと住宅の変遷

就職時は大牟田市明治町の自宅にいたが、白アリがひどく、母の実家がある江の浦（現みやま市高田町）に住んでいた。昭和25年の結婚を期に、長溝社宅（歴木）に住む。新築だった。二軒長屋で、間取りは、各戸に畳の部屋が3つと台所・トイレがあった。共同で浴場と水が使える場所（洗濯・水くみ）もあった。家には水を貯めておける場所しかない。昭和34年、職員採用された頃に長溝社宅内の2階建ての社宅に移動。二軒長屋だが2階建て。1階に4畳と台所・トイレ。2階に6畳と8畳。お風呂は各戸つきで石炭で沸かす風呂のため、鼻の下が真っ黒になりながら沸かした。

（満子さん）

父は家にはほとんどいないという印象。三交替で、一番は早朝（7時よりも前）に出勤、二番は昼、三番で帰ってくる頃には、学校に登校する頃であった。子供が周りに多くいて、講堂がいっぱいになるほど。社宅で球技大会もあった。長溝社宅は七夕社宅の境目だったので、幼稚園は七夕社宅の幼稚園に通っていた。争議時には、仲の良かった付き合いが、急に悪くなり大変だった。石を投げられることも。この頃、父は、会社で寝泊まりしていて、ほとんど帰ってこなかった。

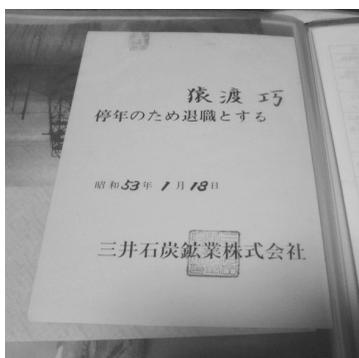
昭和35年の争議時には、1年間だけ日出町に家を買った。家を購入したが、すぐに区画整理のため、立ち退きをしなければならず、1年後には、また長溝社宅に戻ってきた（2階建ての同じ場所に再入居）。

日の出町に1年間転居したときは、それまでの三池小から白川小に転校した。周りは炭鉱に勤めている世帯は、ほとんどいない。バス停の近くだったため、自宅がバス券などを売っていたため、その手伝いをした。家にテレビを購入し、それまでは自分が近所の人にテレビを見に行っていたが、今度は、近隣から見にくるようになり、大勢、集まっていた。楽しかったという思い出がある。昭和45年から46年頃、現在の今山に自宅を購入。親戚からの紹介で土地がうまく手に入ったから。退職までの7年間くらい。どこに引っ越そうとも、職場までは

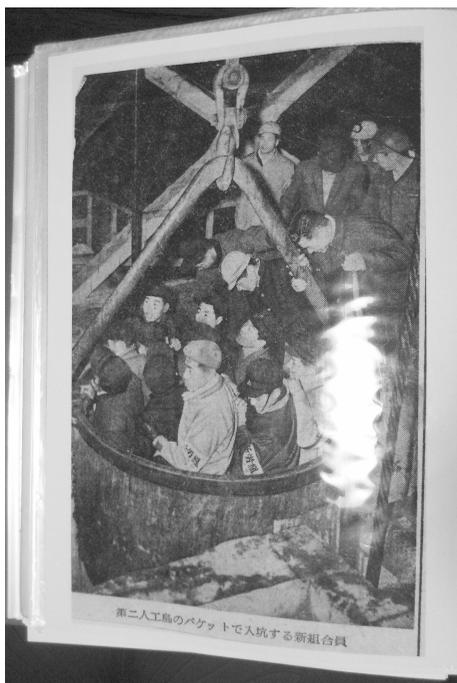
自転車（のちにバイク）で通える範囲であった。



宮浦鉱関係資料



退職証



三池争議時の入坑の様子

おおいえ

大家 まどか さん

プロフィール

女性、52 歳、父が万田坑で測量→三川坑で保安係→職員（主に通気として勤務）、大谷社宅・万田西町社宅（まどかさん出生）・原万田社宅（職員社宅）・船津社宅（職員社宅）で育つ。本人は民間会社や行政嘱託を経て、NPO 従業員。



万田西町社宅の「西町桜」

両親のことなど

私の家族は両親、4 歳上の兄の 4 人。父方の祖父はもともと炭鉱で鉱員をしていたが 30 代で、結核で亡くなった。そのとき父が 15 歳、6 人兄弟の長男で家族を養うことになった。生前、祖父から農業技術の仕事につくよう言われ、父もそのつもりで専門の高校に行こうとしていたが、祖父の死後、一家を支えなくてはならなかったため、祖父の代わりとして 15 歳で炭鉱に入った。高校に入る夢がかなえられなかったこともあって、初めて暗くじめじめした坑内に下がったときに「ここは地獄の一丁目だ」と思ったという。母は車職人の娘で専業主婦。炭鉱とは関わりない。

父は勉強が続けられなかったこともあって、23 歳頃に働きながら夜間の高校に 4 年、さらに短大に進学、中学社会の教員の資格をとった。その間は会社が残業をしなくていいように、考慮してくれた。会

社と仲間の協力で、学校に行けたと言っている。父は、教師に転職しようと就職先を探したが、離島やへき地しかなく、生活の面から断念した。その後、父の後輩も夜間の高校・大学に行く人が続いた。その中には、会社を退職して、教師になる人もいた。炭鉱と全く異なる職場で、「失敗したかな」と思ったが、その後、炭じん爆発事故を目の当たりにして、教師で生きていく覚悟を決めて、定年まで勤め上げたそうだ。

大谷社宅の時代、会社では残業をすると、パンの支給があったので、兄が小さい頃は、残業後にパンを持って帰る父のことを指して「パン」と呼んでいたらしい。父は職員登用後、住宅環境が良くなり、給料もよくなったと言っていた。現在では考えられないが、休みを週1日もとらないこともよくあった。

父の勤務地は、私が生まれる前に万田坑から三川坑に変わり、定年まで三川坑だった。いろいろなことが社宅ではあったようだ。引っ越した今でも、社宅の友人とつきあいがある。

西町社宅

昭和34年～42年の間が西町社宅だった。西町社宅は当時優良鉱員向けの社宅で、住宅環境も良いことから、入居希望者が多かったところだと聞いている。もともと西町社宅に親戚が住んでいたが、退居することになり、その機会に親戚と交替で入居することができた。昭和34年に入居し、そこで私は生まれた。当時はもう少なくなっていたが、病院ではなく産婆さんに取り上げてもらったので、社宅で生まれている。

木造5軒長屋 台所、茶の間、小部屋、トイレがついていたと思う。近所づきあいがあり、仲が良かった。毎朝協力して、長屋の前の溝を掃除する決まりがあった。朝の8時くらいに誰からともなく集まり10分ほどで終わったと思う。母は社宅内の集会所で生け花や栄養指導を受けていた。また、着物・布団・毛布などを、業者が婦人会に頼んで社宅に売りに来ることもあった。

(社宅配置図を見せながら) 会社の保育園、炭鉱で働く人たちの子供が通う保育園というのがあった。それで、4歳～6歳まで私はこの西町から、この保育園に通園した。とても小さかったが記憶が幾つかある。(保育園に行く) 道が、こうつながっており、そこを毎日通園していたので、この辺の、記憶があるところを書き込んでいる(地図参照)。思うと結構遠かった。人気(ひとけ)のないところで、(時代が)昔だったから行けたんじゃないだろうか。今だったら、多分、誘拐とかあったらと考えると怖いのではないか。この周りもずっと社宅だった。で、もっと広い範囲の社宅の子供が来ていた。(地図も)社宅全体の一部なので。

万田西町の社宅の近くには万田公園とプールがあり、たまにプール方面に遊びに来たりすることはあったが、小学校1年の時に引っ越ししたので、1人でプールに遊びに行く機会はなかった。父の話によると、オリンピックの強化選手なんか来て、水泳を教えたこともあったようだ。近くにはテニスコートもあり、そこで(保育園の)運動会も開かれたことがある。西町社宅は万田山の裾野にあったため傾斜が多く、奥は万田山になっていて、子供の恰好の遊び場だった。

社宅の一角に結構気持ち悪い場所があり、子供心にも、近づきたくない場所で、大人も「あそこには行くな」と言っていた。それが何だったのか分からなかったが、どうやら万田坑を掘った跡を埋め戻すために、土砂を入れた充填坑(じゅうてんこう)跡だったようだ。とにかく西町は第一に楽しかった印象がある。例えば(地図上を指して)ここのお宅に遊びに行くと、「あ、遊びに来たね」「これがあるけん、食べんね」といろいろ食べさせてくれた。ここのお家のお父さんは、弁当のおかずで作られたゆで卵を、自分は食べずに、「食べんね」って、私にくれた。そうしたらその家のお母さんが「あっ、お弁当のおかずなのに！」と。その後、ひそひそ声で「あんた、今日のお弁当のおかず、食べさせてどうするんね」っていう声が聞こえて来た。「あ、悪いことしたなあ」って思いつつも食べてしまった。とにかく、おもしろく楽しい記憶が多い。ま

た別の家には、私よりも一つ年下の子が住んでおり、ずいぶん入り浸っていた。(原万田社宅に)引っ越した後も、炭鉱電車に乗って、「妙見(みょうけん) 駅」まで行き、泊りがけで遊びに行っていた。妙見駅の近くには「アソニット」という、炭じん爆発の後で、未亡人の方たちが働いていたニット工場があったが、その前の時代は、万田分院といって、会社の病院の分院があった。炭鉱電車は子供でも乗れた。乗りたい人が勝手に乗っていた。そのうちに従業員と家族にはパスみたいなものが配られて、それを提示しなければいけないようになった。

生活は西町社宅で事足りた。道路を渡ったところに店があり、ちょっとした日用品や食料はここで買えた。私たちは「前ん店(まえんみせ)」って呼んでいた。それとは別に三池商事の売店が、万田坑の前にあった。この2つの店で大体の必要なものは手に入った。西町の記憶は保育園くらいの小さい子供が見た世界だから、本当に狭い範囲の話だ。

原万田社宅へ

父が鉱員から職員になったので鉱員社宅である西町社宅にいらなくなり、昭和42年、私が小学1年生の夏休みに原万田社宅に引っ越した。比較的近距離の引っ越しだったが、校区は変わり、荒尾四小から荒尾三小に転校。ここには、小1から中2までいた。

建物は2階建ての4軒長屋、両端の家は2階へ直に行ける大きな階段がついており、前は異なる目的(独身寮だったようだ)で使用していたのを、改修して社宅にしたのではないかと考えられる。長屋を壁で2階建て4軒(メゾネットタイプ)に区切ってある社宅だった。広さは、西町社宅よりも広く、1階に台所、茶の間、座敷、トイレ、大きな物置があった。2階に3部屋、子供部屋に使っていた。入居したのが長屋の端だったためもう一つ2階につながる小さな階段があった。お風呂は(職員社宅用の)共同浴場。職員社宅は戸数が少ないので、共同浴場も小さかった。周りに大規模な鉱員社宅があり、その共

同浴場の方がずっと大きかったので、人が少ない時は泳ぐこともできた。うらやましかったが使うことはできなかった。

原万田社宅は、自宅の前に原っぱとミニプールがあり、そこで遊ぶことが多かった。原っぱの手前に花壇があり、夏は花壇の中心の水銀灯に虫がたかり、バチバチっと音がしていたのを思い出す。

この頃、父は常一番勤務に変わった。自然発火の兆候があると、緊急の呼出しを受けた。父の呼出しは休日だろうが、夜中だろうが関係なかった。夜中に事務所の人からたたき起こされ1人現場へ向かったことも1度や2度ではなかった。父によると三川坑に到着すると父を現場に送るために人車が待機していたという。その人車に飛び乗り報告のあった場所を特定し、処置をするために暗い坑道の中を進んだそう。人車を降りるとキャップランプの明かりだけで先に進み、独特のにおいを頼りに探したという。

当時は家に電話がなく、事務所に連絡が入るようになっていた。電話がある家は、よほど余裕のある家か、仕事上設置の必要がある家だった。この頃までは、まだついていない家が多かった。それから数年後に私の家も申し込んだが、電話を設置するまで、1年以上かかった。

友達の父親が事故に巻き込まれ亡くなったこともあった。子供ながらにショックだった。とても優しいおじさんだった。原万田社宅にも近くに炭鉱電車の原万田駅があり、当時は家族も乗れたので、私の成長とともに行動範囲が広がった。5年生以上になると子供だけで炭鉱電車に乗り三井グリーンランドへ遊びに行った。この頃になるとだんだん、自家用車を持つ世帯もでてきた。

母は、社宅内にある売店（肉・魚・八百屋に、今で言うスーパーがついたようなもの）、私たちは、マーケット（貸本屋・雑貨屋・駄菓子屋）で買物をしていた。マーケットに行くのは私の楽しみであった。社宅で手に入らない、衣類などは四山にあるお店に買いに行

ったりしていた。四山は大きな市場があり、値段も安かった。電気・水道は会社の社水をひいているので、費用はかからなかった。

当時は、お弁当を買う場所はなく、妻が病気で、夫のお弁当が作れないと、近所の奥さんが、代わりに作ってくれたりすることもあった。母が風邪でお弁当や食事が作れなかった時、裏の奥さんに「ごはん、食べていかんね」と言ってもらったこともある。

原万田の鉱員社宅の空き家もだんだん目立ってきていたので、家族に内緒でそこで拾ってきた犬をこっそり飼ったこともある。会社なのか、組合なのかは分からないが、子供のイベントを開いてくれていた。荒尾セントラル（映画館）を貸し切って、まんが祭り、集会所でクリスマス会などがあった。最後に抽選会があり、豪華賞品が結構あった。新組合（三池新労組）では、小学校に入学する児童に、ランドセルがプレゼントされた。父は新組合だったが、ちょうどそのタイミングで職員になったため、みんながもらえるランドセルをもらい損ねてしまった。「私だけ、ランドセルが違う」と残念だったのを覚えている。

組合のあつれきは、私が物心ついた頃はおさまっていたようだったし、なんとなく「これは多分、子供が聞いてはいけないことだ」というのは、肌で感じていた。子供同士には、大人の事情は全然影響なかった。

船津社宅

原万田社宅に中学校2年生までいたが、社宅を整理する会社の方針で、原万田社宅にいられなくなり、船津社宅に引っ越した。家はかなり広く、一軒一軒が独立して、周りを高い塀で囲まれていた。社宅だったが長屋ではなく、一軒家であった。石炭風呂や女中部屋があった。建物自体は古かったが立派な庭がついていた。

船津社宅で、初めて水道代を払った。水の使い方、社宅育ちかどうか分かると言われていた。社宅だと、水やお風呂は無料みたいな

ものなので、流しっぱなしにするから、とされている。社会に出てからは、気を付けようと戒めていた。

船津社宅付近は住宅地だが、以前までの社宅のような近所つきあいではなく、友達つきあいは社宅とは関係ないつきあいとなった。

原万田社宅から船津社宅は近距離の引っ越しだったが、校区が変わった。特に熊本県から福岡県に変わるため、教育方針、教科書が変わり、中3で受験を控えた年度初めに転校したので、適応するのに苦労した。高校3年生まで船津社宅にいた。その後、両親が荒尾市に家を建てて社宅を出た。現在もその建てた家に在住。

社宅時代を振り返って

私が小さい頃は周囲にいる人は社宅に住んでいる人ばかりだったので、特に思うことはなかった。高校生になり、炭鉱とは関係のない友達から、「子供の頃、社宅同士の友達の輪の中には入りにくかったよ」と言われて、外から見るとそう見えたのかと気付かされた。小学校は炭鉱関係か社宅の友達がほとんどだったし、中学校でもかなり多かった。友達には父親を(坑内の)事故で亡くした子もいた。船津社宅に移ると、同年代の子がいなかった。

現在はNPO 大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ関係の業務で万田炭鉱館に勤務している。歴史好きでたまたま炭鉱関係の歴史の仕事に携わることになり、かつての社宅の白地図を見つけて眺めていると幼い頃の記憶がよみがえり、記憶をたどって書き足してみた。万田山で木の実を拾ったり、落ち葉を拾ったり。夏の日には、汗かいて、大きい子供の後を追いかけたり、秋の枯草にボンッと飛び乗って遊んだり。今でも枯草の匂いがしたりすると、社宅の生活を思い出すことがある。

書き込み部分は昭和42年～45年頃の記憶

原野社宅

高い木の頂上付近で鶴が紐に絡まり動けなくなりました。悲しげな鳴き声に子供たちは胸を痛め大人に助けを求めた。人が登るには隙が細く、ハンシロをかけるには高すぎて取付することができなかつた。あれだん弱っていき、やがて遠くまで鳴き声は消え失せました。

グラウンド？
(この辺りだったと思う)
立派なバスケネットがあった。

原野社宅の思い出

学校の用則の関係で、子どももだけで遊びに行けるようになったのは昭和45年頃だったと思っています。監視下ではなく、自分たちで原野電車を利用するようになったのは自覚だった。従業員の家族は自由にならなくて電車に乗ることができなくなりました。

原野電車からの行き先は3箇所、平井駅で降りる「三井グリーンランド」上妙見駅の「西野社宅」、西原駅の「くんださん祭り」だった。平井駅では花見車庫の入れ替えが面白かった。

「くんださん」の日は、学校が午前中で終わって帰った。当時は国道389号線沿いにたくさんのお店が並ぶとても賑やかだった。

社宅の商店街

上(北)から順に倉本屋、雄荷屋、駄菓子屋が並び、おはあさんの貸本が楽しかった。

原野田売店

売店の敷地内に売店と魚屋、肉売店、八百屋があった。大抵のものはここで買えるので便利だった。

すべり台

親に叱られて家出をしたくなくなった時はすべり台の上から夕日を眺めた。

監督えは昇職人が数名で社宅へ出張して行った。各戸で量を職人の元へ運び、出来上がったものを引取りに行った。職人は社宅内の空欄を見つめ少しずつ移動していた。自分の所に近づいたときに量を運んだ。

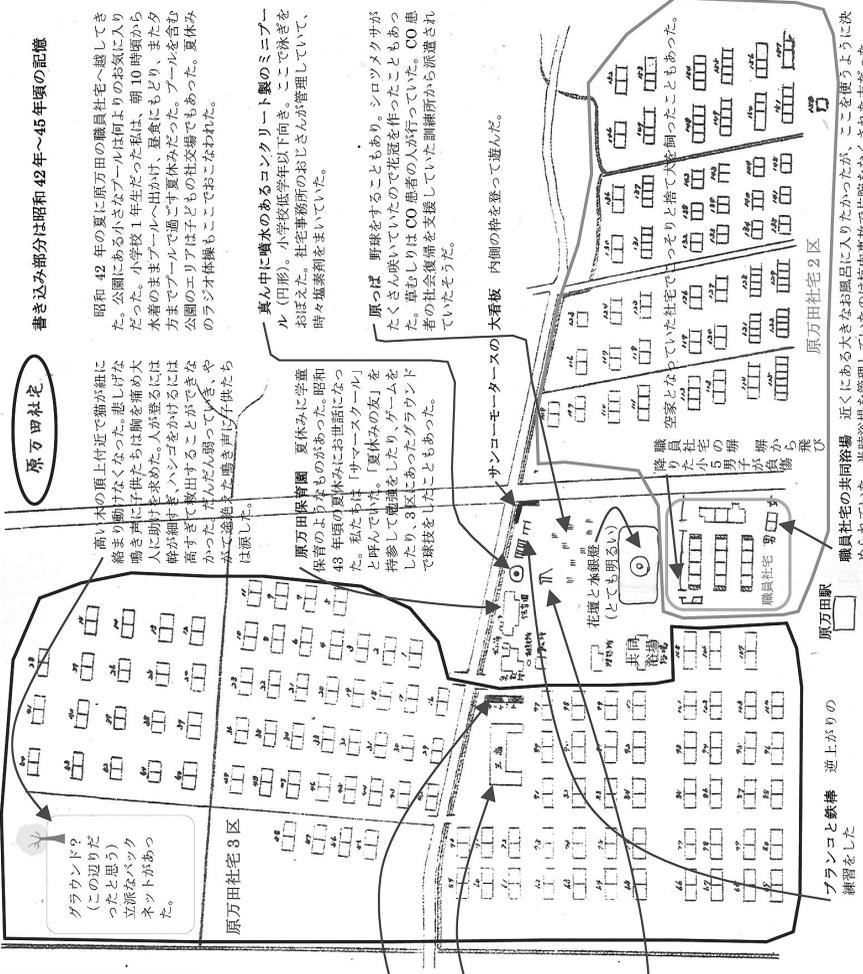
昭和42年の夏に原野田の職員社宅へ越してきた。公園にある小さなプールは何よりのお楽しみだった。小学校1年生からプールへ出かけ、夏食にもどりと、また夕方までプールで過ごす夏休みだった。プールを含む公園のエリアは子ども達の社交場でもあった。夏休み公園のジョオ体験もここでおこなわれた。

真ん中に噴水のあるコンクリート製のミニミニプール(円形)。小学校低学年以下向き。ここで泳ぎをおぼえた。社宅事務所のおじさんが管理していた。時々塩素剤をまいていた。

原っぱ 野球をすることもあり。シロツメクサがたくさん咲いていたので花冠を作ったこともあった。最悪はCO患者の人が行っていた。CO患者の社会復帰を支援していた調練所から派遣されていたそう。

サンコーモーターズの看板

内側の枠を登って遊んだ。



原野田社宅配置図(大家さん作成)

ふるかわ ひろし

古川 弘 さん

プロフィール

男性、平成 24 年 9 月現在 81 歳、
福岡県稲築町（現在 嘉麻市）出
身、三井山野鋳業所→三池鋳業所



筑豊生まれ、炭鋳の経験

父が筑豊の三井山野炭鋳に勤めていて、社宅で育った。父は石炭を運ぶ運搬*の仕事をしていたが、昭和 15 年 3 月（弘さんが小 3）のときに、作業中に炭車に挟まれる事故で亡くなった。当時、兄が既に同じ炭鋳に勤めており、社宅を追い出されることはなかった。昭和 20 年 3 月 31 日（高等小学校卒業翌日）から炭鋳の養成工として働き始めた。終戦間近だったので、山の開墾だったり、石炭を運ぶ「ざる」（エブ、エビジョウケ）を作るための竹を取りに行ったりという作業をしていた。同年 8 月 15 日の敗戦後、12 月から坑内実習を始め、採炭、掘進*、充填の実習をした。捕虜収容所の撤収作業もした。翌 21 年 1 月～3 月は採炭をしたが、未成年の坑内作業は禁止になり、14 歳だったので 4 月～6 月は坑外の仕事をした。詰所の仕事、竹切り、防空壕の埋め戻しなど。当時は食べたい盛りで、山の竹取りの仕事の時に、一緒に行った人は、昼のお弁当を朝のうちに食べてしまい、山に生えている「ギシギシ」の酸っぱい部分を吸ったり、山のグミを食べたり、トマトがなっていたら食べたりという人に象徴される。

昭和 21 年 7 月、8 月の 2 ヶ月、坑内に入れることになり、採炭の「本方」（ほんかた）として働いた。外地からの復員兵や引揚者が多く、10～30 歳代の若い人たちで編成された切羽だったので、「青年払」と呼ばれていた。「準備方（又は「産炭方）」が松の木で柱打ちをし、充填し、発破穿孔していた。本方は準備方の後について、スコップで

石炭をコンベアに積む。技術はそれほどなくてもできる仕事。当時は復員してきた人も多くいた。

坑内は暗いので、弁当・水筒は、自分の手元に置いておく。自分が後山^{*}をしているときに、同僚が坑内で、「水筒を1杯くれないか」と言われたのだが、あげると自分の分が無くなってしまうので断ったら、落盤があり目の前で同僚が埋まって、足をバタバタしていたのが、忘れられない。その際、坑内の別の場所で働いていた兄が、事故があったと聞いて、弟が遭ったのではないかと心配して急いでかけつけたが、そうじゃなかったと分かって安心していった。兄とは、しばらく一緒の炭鉱だったが、兄は昭和22～23年頃に麻生炭鉱に行った。昭和24年、希望退職で自分たちの先山^{*}だった人が退職した。昭和25年は朝鮮戦争がおこり、再び石炭の需要が高まり、新規採用で同級生数人が採用された。18歳の時に掘進の仕事に移って以降32歳まで掘進をした。昭和38年10月、三井山野鉱業所は規模をそのまま継承し、第二会社「山野鉱業株式会社」として発足した。徹底した機械化を図り、労使の努力で有沢答申（有沢広己を団長とする石炭鉱業調査団による石炭対策に係る総合的な答申。スクラップアンドビルド政策を徹底し、非能率炭鉱はスクラップダウンされた。）の目標を上回るビルド鉱（能率的な採炭を行っている炭鉱）となったが、昭和40年6月1日、爆発事故で237人の犠牲者を出し、昭和48年に閉山した。

昭和32年に結婚し、漆生坑社宅に空きがあったので入居。当時の炭鉱社宅は家族ぐるみの付き合いとはいうものの、鉱員同士は、先輩・後輩の上下関係はしっかりしていた。食べ物が乏しく、電化製品の少ない時代だったが、真空管のラジオは持っていて、近所の子供が正座をして聞きにきた。電気は会社から通っている電気で、時間帯によって制限されていた。時間になったら電気が来なくなるので、ラジオの電源は点けっぱなしでよかった。

三池炭鉱に異動

山野炭鉱には生まれてから計 32 年間いたが、昭和 38 年の 10 月 2 日に三井山野から、三池炭鉱にやって来た。山野炭鉱に残ることもできたが、新会社で新規採用になってしまうので、今までのキャリアが生かせない。三井の炭鉱だと、そのまま経歴を持ちこせるということだったので、三池炭鉱に来ることになった。ただし組合は、三池新労組に入るという条件だった。

当時、自分と同じように 100 人以上が再採用で当地にやって来たが、それぞれ宮浦、三川、四山、港務所などに分かれていった。自分は宮浦坑の配属。宮浦坑は比較的浅いところの石炭層を掘っていたので、まだ長壁式*切羽（ロング払）はなく、小切羽採炭*だった。職種は掘進工でありながら、小切羽採炭へ行くことが多かった。

同年 11 月 9 日に三川坑爆発事故が起こっている（死者 458 人）。自分もかつての同僚を亡くした。

宮浦坑では、5 人で 1 チームを組み、4～5 チームで岩盤掘進の仕事をした。新労同士で組むことが多かったが、旧労（三池労組）の人たちの中で、自分だけが新労という場合もあった。

坑内の口笛禁止という話は聞いたことがあるが、それは昭和の初めの頃の昔話で、実際は関係ない。覚えているのは、小切羽採炭の現場で、当時の東京オリンピックの CM のキャッチフレーズ「より速く、より高く」にちなんで、「より広く、より速く、より高く」掘り下げるんだということを言い合っていた。

その後、昭和 40 年、宮浦坑での採炭は長壁式切羽動枠払となり、そのとき払採炭工になった。昭和 41 年には分層払（スライジング払）となった。昭和 44 年に、仕事場は変わらないが、坑口は三川坑から入坑することになった。

昭和 48 年からは、当時、日鉄鉱業から有明坑が三井の管轄になったので、それまでの坑道をつなげて、石炭層を見つける着炭、昭和 51～52 年頃は、有明坑の掘進として、払ができれば採炭の仕事をし

ていた。昭和 59 年 1 月の有明火災の時は、採炭の仕事であったが、ちょうど自分は家にいた。その後しばらくは仕事ができなかったので、火災の後片付けをやっていた。昭和 61 年に 55 歳で定年退職した。

勝立社宅の生活

三池にやってきたのは、争議後だったので、争議自体は経験してないが、争議後の雰囲気は社宅に残っていた印象がある。家族で引っ越した社宅は勝立社宅の中の宮前(みやんまえ)社宅。社宅には長屋が 57 棟あり、その中には旧労、新労もいた。お隣さんに旧労の人もいたが、自分たちは争議後にやってきたこともあって、近所付き合いは、分け隔てなくできた。同じ社宅でも、支部は旧労・新労に分かれ、子供のスポーツのチーム、家族会、イベントも社宅ごと、組合ごとに分かれた。新労では、組合の支部のトップは地区長と呼ばれて選挙制。他に副地区長、体育部長、厚生部長などがあり、任期制で、自分も体育部長、厚生部長を歴任した。

夏休みになると、小学生のチームの世話が回ってきて、休日を充てたものであった。勤務とスケジュールが合わないことはなかったが、冷たい飲み物を用意したり、食べ物のために持ち出したりすることもあった。でも、子供はよその大人の言うことは、よく聞いてくれた。職種対抗の試合もあって、自分も競技に出たことがある。その時は休日を合わせたりした。

坑内でけがをすることも度々あった。手の指の骨折、足の骨折をしたこともある。昭和 45 年～50 年頃には、労災がとりにくくなり、結局、労災をとることはなかった。

当時は、報奨制度があり、精勤制度(日曜、祭日など公休日以外の実働日数(約 300 日)を出勤したら、旅行や金の指輪がもらえる満勤制度)というのがあり、それを励みに、休まず働いた。途中で廃止されてしまったのだが。

社宅は希望をすれば変われるが、自分たちは特に変わることなく、引っ越した当時と同じ社宅にいた。電気釜は引っ越しの時に持ってきたと思うが、当時は家に冷蔵庫はなしの状態、一つずつ増やしていった。車は昭和46年、昭和47～48年に電話を通した。お風呂は共同浴場だったが、個人宅にはガスの導入、瞬間湯沸かし器を取り付けた。買物は社宅の中に、会社組織の売店があったので、そこでその日の分だけ購入した。来客用で冷えたビールが欲しいときには、配達してもらった。クーラーがついたのは大分後だったが、夜勤の坑内勤務の人は、昼に暑くて寝られないので、社宅の中にある勝立倶楽部という講堂に集まって寝に行くことがあった。

昭和55年に勝立社宅の近くに家を建てたので、社宅を離れた。今もそこに在住している。

「こえの博物館」の出演と、石炭産業科学館のボランティア

ボランティアは、「こえの博物館」がきっかけ。宮浦坑の時の上司から話を聞いて、勝立地区公民館に10人くらい集まり、幾つかのグループに分かれて、それぞれの思い出を話した。声の録音はしたけど、話は雑談みたいな内容だった。その後のビデオ撮りは、宮浦坑口の近くで、3人合同で撮影したが、1人は運搬工の人、もう1人は仕繰*の人で、その1人はその時が初対面だった。内容は「炭鉱にいたときのことで、覚えていることを話してください」というものだった。退職してから時間がたっていないくて、夢で、現場で働いているところを見ることがあるという時期の話をした。今回みたいな入社が何年だとか、仕事の話は詳しくはしていない。三井化学の電車の音とかで、静かにならなくて、半日のうち2～3時間は撮影があった。完成後、ビデオテープをもらってみたけど、恥ずかしいよね。当時、近所の人たちに「映像見ましたよ」って言われたりして。

石炭産業科学館でボランティアをするようになったのは、11年前から。坑内で黙々と働いていたので、しゃべることはあまり気が進ま

なかったが、ボランティア教育というのものもあるし、マニュアルもあるからということ。「こえの博物館」でお世話になった石炭産業科学館職員(当時)に薦められて、やることにした。以前はガイドする日を決めて、そのスケジュールが郵送で送られてきていたが、だんだん、石炭産業科学館の方で、ガイド説明もできるようになったということ、今は、自分が行ってみようかという時だけ行くようになった。

ボランティアで説明するといっても、お客さんの中には詳しい説明が欲しい時とそうでない時がある。家族連れの人とかは自分たちだけで見たいという人もいるし、団体さんも次に行くための出発時間が決まっている。以前、団体さんに向けて説明していたら、石炭産業科学館の職員の人に「次の出発時間があるので、もう説明はちょっと切り上げてください」と言われたり。そうかと思えば、他の人がやってきて質問してくる場合もあるから、だんだん要領を得ていった感じ。

自分が仕事でよく知っている「ダイナミック・トンネル」のところは詳しいが、歴史のところはあんまり。だけど、入ってすぐに大型機械があるのは不自然で、あと、柱の本数、抜き方、くさびの打ち方なんかも、自分のいたところとは違う。